

お菊 時雨も歌や俳諧では面白さうに詠んでみますが、馴れぬ旅路へ踏み出して、きのふも時雨、今日も時雨は、一としほ佗しく思はれます。

千六 皆さま方のお心の中は、わたくし共もよくお察し申上げて居ります。これが大坂見物か京見物の御遊山の旅ならば、お供申して行く張合もござりますが……。いやもう、こんな事は申上げますまい。

お菊 京も浪華も一度は見物したいと云つてゐましたが、こんな悲しい旅をしようとは……。 (眼をぬぐふ。) 夢にも思ひませんでした。

おいの お前にそんな嘆きをかけるのも、みんなわたしの心得違ひから……。どうぞ堪忍して下さい。

お菊 あれ、伯母様。なにを仰しやります。

おいの (嘆息して。) まゝ子を憎むと云ふではなけれど、治左衛門と喜八郎は腹ちがひの忤、惣左衛門は生みの忤、自然の人情から惣左ばかりを甘やかして育て、兄たちも持餘すやうな我儘者に仕立てたのは、この母のあやまり……。あの晩のことも惣左の非分とは知りながら、生みの子を討たれた無念さに、たゞ一筋に傳八郎を恨んで、氣の進まぬ治左衛門兄弟を無理にかたき討に出して遣つて……。 (これも涙をぬぐふ。) 揃ひも揃つて返り討……。

(お菊は聲をあげて泣く。千六も眼をぬぐひて俯向く。)

おいの 大坂の藏屋敷から内々の知らせで、治左衛門兄弟は崇禪寺馬場で返り討、相手の傳八郎はその場から姿を隠したといふ。それを聞いた時の悲しさ口惜しさ……。 (又泣く。) 一

且はこの胸が張裂けるやうでした。それも尋常の勝負とあることか、大勢の味方をかたらひ、だまし討同様に致したとやら……。

お菊 それも尋常の勝負とあることか、大勢の味方をかたらひ、だまし討同様に致したとやら……。あまりと申せば卑怯な事でござります。

千六 御家中にゐる頃は、評判のいゝ傳八郎でござりましたが、どうしてそんな卑怯なことを致しましたか。御兄弟様の御無念が思ひ遣られてお悼はしうござります。

おいの 傳八郎の卑怯は云ふまでもない事で、甚五郎どのも齒齧みをして残念がつてゐられましたが、今となつて段々かんがへれば、恨むまじき人をかたきと恨んで、治左衛門兄弟を出して遣つたのが抑もく、のあやまりで、唯そのまゝに捨て、置いたら、兄弟も返り討の悲しい最期を遂げず、遠藤の家もほろびず、お菊どのにも嘆きをかけず、三方四方が無事に済んだものと、此頃ではつくづく後悔してゐます。 (涙をぬぐふ。) 女ごころの浅ましさを、恨みと僻みに修羅を燃やして、繼子ふたりをむざ／＼殺しに遣つたかと思へば、兄弟のかたきは傳八郎でなく、かたきは此の母であつたかも知れませぬ。

(おいのは泣きながら嘆き入るを、お菊は優しく介抱する。千六も立上る。)

千六

御隠居様はどうやらおかせを召したやうでござります。こんな所に長居をなされては、おからだの爲にも宜しくござりませぬ。早く今夜の宿へまゐりませう。

おいの 返り討になつた兄弟の死骸は、世間の手前を憚つてお藏屋敷で引取ることも出来ず、そのまゝ崇禪寺に葬つてあると云へば、一日も早く行き着いて、その新しい墓の前でわたしは一言の詫びが云ひたい。

お菊 わたくしも御兄弟のお墓に参詣して、心ばかりのお回向を致したいと、かうして連れ立つて出ましたが、足弱連れの抄取らず、氣ばかり急いでなりませぬ。

千六 (再び空をみる。) 幸ひに時雨も通り過ぎました。さあ、暮れない中にお供を致しませう。

(千六は荷物をかつぎて笠を持つ。おいのとお菊も立上る。)

おいの さつきお菊どのも云つた通り、悲しい旅に毎日の村しぐれ……。旅は憂いものといふ諺も、今のわが身に思ひ當りました。

(云ひかけておいのは又咳き入るを、お菊は介抱する。)

お菊 時雨は晴れても、野づらの夕風が身にしみます。どうぞお氣をつけ下さりませ。

千六 次の宿までは一里あまりと申しますから、もう些つとの御辛抱でござります。

おいの ふだんは達者を自慢しても、かういふ時には皆んなの厄介者、どうぞ宜しく頼みます。

お菊 さあ、まゐりませう。

(おいの等三人は上のかたへ行きかゝる時、上のかたより佐助は旅姿、荷物を肩にかけて、笠を持ち、先に立ち出て出づ。つゞいてお玉も旅姿に頭巾をかぶり、杖と笠

を持つ。そのあとより大原軍藏も旅姿。おなじく笠を持ち出て出づ。先に立ちたる佐助はおいの等一行を見て俄におどろき、彼等に見付けられぬやうに笠をかたむけて額を隠せば、おいの等一行は氣が附かず、お玉と軍藏は知らず、そのまゝに摺れ違ひて、おいの等は上のかたへ立去る。佐助はほつとしたやうに、立ちどまりて見送る。)

佐助 (ひとり言。) やれ、やれ、思ひがけない事であつた。

軍藏 なにが思ひ掛けないのだ。

お玉 佐助さんはあの三人づれを知つてゐるのですかえ。

佐助 知つてゐるどころか、飛んだ所で飛んだ人たちに出逢つて、わたしも實にぎよつとしました。(聲をひくめる。) あの女連れは郡山の……。遠藤一家に繋がる人達で……。

お玉 え。(思はず引返して見送る。)

軍藏 では、あの三人は遠藤が身寄りの者か。

佐助 (うなづく。) 年上の女は治左衛門と喜八郎の繼母で、惣左衛門の生みの母、おいのと云ふのです。

お玉 して、若い娘は……。

佐助 若いのはお菊……。おいのが弟矢崎甚五郎の娘で、喜八郎とは許嫁だとか聞いてゐますよ。

お玉 それでは許嫁の夫を討たれて……。 (ほろりとして。) ほんに悲しいお身の上……。ひとの事とは思はれませぬ。

佐助 供の男は中間の千六……。三人連れ立つてゆく先は大坂でせうな。

軍藏 兄弟の死骸は崇禪寺に埋めてあるといふから、あの人達はこつそりと参詣にでも行くのだらう。

お玉 あの人たちは大和から大坂へ……。わたし達は、大坂から大和へ……。かたき同士がこゝで摺れ違ひながら、知らず知らずに別れるとは……。 (再び上のかたを見返る。) 世の中のことは何と云つていゝやら、まつたく判らないものですねえ。 (軍藏等に。) それにしても且那様は、確に郡山へ戻られたのでせうか。

佐助 さあ、大坂近邊の心當りを探しても、おゆくへが一向に知れない以上は、先づは故郷の郡山と見當を附けるの外はありませんまい。

軍藏 おれもさうだらうと思ふのだが、扱その郡山へお歸りになつてから……。

お玉 (あわてゝ。) それが案じられてならないので、跡を追ひかけて來たのですが、このあひだの様子では、もしや故郷へ歸つた上で……。

佐助 わたしもそれを案じてゐるのですよ。

(三人は顔を見あはせて、口には云はねど一種の不安がいよゝ／＼募る。)

軍藏 かうなつたら道中で評議をしてゐても仕方がない。一刻も早く先を急がうではないか。

お玉 あの人たちに逢つたらば、猶更こつちの事が氣にかゝつて來ました。さあ、急いで行きませう。

佐助 空は一旦晴れかゝつたと思つたら、又一と時雨降つて來さうになつた。この頃の天氣にも困つたものだ。

お玉 濕れるのを厭つてはゐられませぬ。 (せいて。) さあ、さあ、急ぎませう。

(薄く時雨の音。お玉は先に立つてゆく。軍藏と佐助もあとに續き、いづれも足早に向うへ去る。)

時の鐘。辻堂の扉をあけて生田傳八郎、旅姿にて編笠を持ち出て、縁を降りて先づ上のかたを窺ひ、更に向うを見てゐる。數日前に比ぶれば傳八郎の顔色は著しく青ざめ、頗る神経質になつてゐる。時雨の音強くなる。)

傳八郎 (空を仰ぐ。) また降つて來たか。

(傳八郎は舌打ちしながら、再び小戻りして辻堂の縁に腰をかける。下のかたより土地の者らしき女ひとり出で、上のかたへ急ぎ去る。上のかたよりも旅の者らしき男二人出で、これも下のかたへ急ぎゆく。やがて又、上のかたより圓の銀次、これも道中さし一本の旅姿にて、菅笠をかたむけながら急ぎ出づ。)

銀次 道中泣かせの天氣で仕様がねえ。 (云ひながら辻堂の前へ來て、傳八郎と顔を見あはせる。) やあ、御堂の先生……。こりやあどうも……。不思議な所でお目にかゝりました

ね。

傳八郎 お、銀次……。おまへも旅に出たのか。

銀次 まあ、御免なせえ。(縁の端に腰をかける。)時雨とやらにやあ困りますね。(手拭でか
らだを拭いてゐる。)

傳八郎 おれもこの辻堂に雨宿りをしてゐたのだ。

銀次 實は先生。わたくしもしもいよ／＼草鞋をはく事になりました。と申したら、大抵お察しで
ございませうが、悪い噂が高くなつて、町方の詮議がむづかしいので、そのほとぼりの
冷めるあひだは、當分大坂へ御無沙汰をする積りでございます。

傳八郎 さうして、これから何處へ行くのだ。

銀次 五條に知つた者がありますから、一先づそこに落付いて、それから方角を決めようと思
つてゐますが、先生はどちらへ……。

傳八郎 おれか。おれは……。 (曖昧に。)奈良の方へ行くのだ。

銀次 それぢやあ御一緒にお供ませう。

傳八郎 貴様のやうな奴と道連れは迷惑だ。

銀次 そんなに毛蟲扱ひにするものぢやあねえ。旅は道連れと云ふぢやありませんか。

傳八郎 その道連れも人による。貴様と一緒に歩くのは、胡麻の灰を連れて歩くやうなものだ。

銀次 (むつとして。)胡麻の灰とは御挨拶だ。だが、先生。さう云ふお前さんだつて、世間の

評判は好くありませんぜ。

傳八郎 (聞き咎める。)なに、評判が悪い。

銀次 遠藤の兄弟を崇禪寺馬場へおびき出して、大ぜいの味方をたのんで返り討……。あんな
り卑怯だ。侍らしくねえ仕方だと、行く先々でお前さんの噂をしてゐますぜ。

傳八郎 (急所を刺されたやうに。)そんな噂をしてゐるか。

銀次 (忌がらせるやうに。)お氣の毒だが廣い大坂中で、先生を褒める者は一人もありません
よ。それに引きかへて遠藤兄弟は、可哀さうな死方をしたといふので、崇禪寺の墓には
參詣が絶えないさうです。

傳八郎 遠藤兄弟の墓には參詣が絶えない……。それは結構なことだ。

銀次 だが、お前さんにやあ些つとも結構ぢやあねえ。參詣に来る者は、みんなお前さんを悪
く云つてゐますよ。生田傳八郎は卑怯な奴だと……。

傳八郎 (叱るやうに。)おれは卑怯でない。

銀次 でも、世間でさう云つてゐるのだから仕方がねえ。芝居でも、かたき役は賞められ
ねえものだが、おまけに相手を返り討にしたのぢやあ、どう考へても可愛くねえのが當
りめえさ。

傳八郎 (いら／＼して。)やかましい。おれの心が世間の奴等に判るか。

銀次 判つても判らねえでも、論より證據、大ぜいの味方を頼んで、相手をだまし討にして

傳八郎 だまし討ではない。

銀次 大勢が遠矢を射たと云へば、だまし討も同様だが……。 (云ひかけて又あざ笑ふ。) いや、もう、こんな話は止めに行ませう。こゝで論をしても後の祭で、なんの役にも立たねえわけだ。そこで先生。少しお願ひがあるのですが……。

(傳八郎はだまつてゐる。)

銀次 今もいふ通り、わつしも自分のからだに火が付きかゝつたので、碌々に旅拵へをする間もなく、着のみ着のまま、同様で大坂を飛び出して来たのですから、この寒空に懷ろは猶さらお寒い始末で、心細くてなりません。こゝでお目にかゝつたのも何かの御縁と思召して、幾らかお恵み下さいませんか。

傳八郎 おれも懷ろはさびしいのだ。貴様に貸すやうな金はない。

銀次 でも、先生とわつし等とは違ひませう。助太刀の門弟衆からも、相當のお餞別が集まつた筈だ。ねえ、先生。後生だから幾らか貸しておくんなせえ。

傳八郎 (叱る。) 金は無いといふのに……。うるさい奴だな。

銀次 やれ、やれ、おれも返り討か。(立上る。) どうせ卑怯な先生だ。清く貸してくれる筈がねえ。

(銀次は鼻で笑ひながら、笠をもちて向うへ行きかゝる。傳八郎は衝と立つて銀次

に追ひつき、その腕をつかんで椎の大樹の前へ引戻して来る。)

銀次 え、なにをするのだ。

傳八郎 (睨む。) 貴様はさつきから傳八郎に對して、卑怯だの、だまし討だのと、幾たびも悪口雑言を申したな。

銀次 おれが云つたのぢあねえ。世間で云つてゐるのだ。

傳八郎 たとひ世間で何と云はうとも、本人の前では遠慮すべき筈だ。貴様はわざと面當てられ、さつきからおれの前で呶鳴つてゐるのではないか。

銀次 (空嘯く。) わつしは物を隠すのが嫌ひだから、聞いた通りを正直に云つたのさ。

傳八郎 だまれ。

(傳八郎は抜き撃に銀次を斬倒し、その死骸を蹴返す。)

傳八郎 おれもこんな奴等にまで嘲弄される身の上になつたか。

(傳八郎は苦笑ひしながら、血刀をぬぐひて鞘に納める時、下のかたにて村の男等の聲きこゆ。)

村の男 (口々に。) さあ、さあ、早くしろ。

(その聲におどろかさされて、傳八郎は銀次の死骸を大樹のうしろへ押隠し、自分は樹の下に立つて窺ひる。下のかたより村の男二人は茅の束をかゝへ、一人は梯子を持ちて出づ。)

男一 さあ、小降りのうちにお堂の家根を繕つてしまへ。雨がたんと漏るといけねえぞ。
 男二 近いうちに雪でも降られると、なほ困るからな。
 男三 なんでも裏手の家根が傷んでゐるさうだぞ。
 男一 兎もかくも梯子をかけてみろ。

(男二は辻堂の軒に梯子をかけ、男一と二は茅をかゝへて家根に昇る。そのあひだに傳八郎は笠をかぶり、素知らぬ顔にて下のかたへ行き過ぎる。薄く雨の音。驛路の鈴の音。)

—幕—

郡山の城下、常稱寺の書院。二重家體の正面は床の間にて、山水の掛物、獅子の置物、碁盤などあり。上のかたに違ひ棚。下のかたに出入りの襖。縁側を下のかたへ折りまはして、板戸の出入り口あり。庭には松その他の立木あり。前の場より二三日の後、曇りし日の午後。

(上のかたに住職良然。下のかたに矢崎甚五郎は羽織袴、手あぶりの火鉢を控へて對坐してゐる。木魚の音きこゆ。)

良然 このたびの一件はなんとも申上げやうもない次第で、定めて皆さまにも御残念でござり

ませう。御心中いくへにもお察し申上げます。

甚五郎 治左衛門喜八郎の兄弟が揃ひも揃つて、返り討とは、あまりに腑甲斐ない始末で、縁につながらる手前共も世間に對して面目なく、肩身の狭い日を送つて居ります。

良然 (慰めるやうに。) 併し勝負は時の運と申せば……。殊に相手は傳八郎ひとりで無く、大勢の加勢があつたとか承はりますれば、あながちに御兄弟の不覺とのみは申されま

甚五郎 それ等の事までお住持にはもう御承知でござるか。傳八郎めは案外の卑怯者、その畏にかゝつて、やみ／＼返り討に逢ひましたは、兄弟の油断とは申しながら、不憫のやうにも存じられます。(云ひかけて。) いや、これは下世話に申す負け惜み……。身蟲眞の愚痴とお笑ひ下さるな。

良然 おふくろ殿とお菊殿は大坂表へお越し下さうでござりますな。
 甚五郎 大坂に藏屋敷はござるが、何分にも世間を憚つて、表向きには死骸を引取ることすらせず、そのまゝ崇禪寺に埋葬してあるとか申しますれば、せめて人並の石塔も建立して遣りたく、身寄りの者の香花を供へても遣りたく、ひそかに姉と娘を送りましたが、馴れぬ女の道中といひ、此頃の寒空では何かと難儀ではあるまいかと、これも聊か案じて居ります。

良然 (不安らしく。) して、お跡目はどうなりませうか。

甚五郎 残念ながら遠藤の家は断絶、姉は大坂から歸り次第に、今までの屋敷を立退かせて、手前方へ引取る筈でござる。

良然 お家断絶とあれば、それより外に致方もござりますまいな。

(良然も感めかねて嘆息してゐる。下のかたの縁づたひに、納所良啓が茶碗を運び出で、二人の前に置く。)

良啓 (甚五郎に。) 疎茶でござります。

甚五郎 (會釋して。) 頂戴いたす。

(良啓は引返して去る。甚五郎は茶をのむ。風の音。)

良然 この兩三日は殊のほか冷えますな。

甚五郎 兎かくに曇りつきで底冷えが致せば、近いうちに初雪を見るかも知れませぬ。

(下のかたの庭口より寺男勘作出で来りしが、甚五郎をみて少しく躊躇してゐる。)

良然 なにか用か。

勘作 はい。(やはり躊躇してゐる。)

良然 どうしたのだ。早く云へ。

勘作 實は、あの……。お客様でござります。

良然 どなたが見えたのだ。

勘作 そのお客は……。 (甚五郎を憚りて云ひ出し兼ねてゐる。)

甚五郎 お客來とあれば遠慮なくこれへ……。手前は墓前に參拜して、そのまゝ立歸ることに致しませう。

良然 もうお歸りでござるか。

甚五郎 意外の長坐を致しました。御免。(良然に會釋して縁側に出る。雪ちらちらと降る。) お唯今噂を致してゐたら、もう白い物がちらちらと降つてまゐつた。

良然 お、たうとう雪になりました。

勘作 今から積られては難儀でござりますな。

甚五郎 初雪だから大した事もあるまい。

(甚五郎は縁づたひに、下のかたの奥に入る。)

良然 これ、どなたが見えたのだ。

甚作 (縁先へ進みよりにて聲を潜める。) 實は生田様が……。

良然 なに、生田……。 (これも聲をひそめる。) あの、傳八郎どのか。

勘作 はい。

良然 どんな姿をして見えられた。

勘作 やはり當りまへの旅姿で……。旅のお疲れかも知れませぬが、顔の色は蒼ざめて、なんだか瘻れておるでのやうでござります。

良然 さうか。あいにくに甚五郎どのが來てゐるから、見付けられぬやうに氣をつけて、そつ

とこへ案内して来い。

勘作 はい、はい。

良然 必ず甚五郎どのに覺られるなよ。

勘作 はい、はい。(引返して去る。)

(風の音。雪ふる。良然は手を鳴らせば、納所出づ。)

良啓 お呼びになりましたか。

良然 別にお客がある。茶の支度をしろ。

良啓 はい、はい。

(納所はそこにある茶碗を片付けて去る。良然は立つて縁先に出で、不安らしく左右を見まはしてゐる。下のかたの庭より生田傳八郎は前の場の旅姿、勘作に案内されて出づ。)

良然 お、傳八郎殿……。

傳八郎 お久し振りでござつた。

良然 さあ、どうぞお通り下され。(勘作に眼で知らせる。)これ、よいか、氣を附けろよ。

勘作 かしこまりました。

(勘作は心得て下のかたへ去る。傳八郎は草鞋をぬいで縁に上る。)

傳八郎 お住持にはいつも御壯健で結構でござる。(會釋する。)

良然 お手前にもお變りなく……。 (傳八郎の顔色や身なりをぢろ／＼見る。)道中は定めてお

寒い事でござつたらう。

傳八郎 道中ではたび／＼時雨に逢ひましたが、これへ着くと雪になりました。

良然 そこで早速ながら、このたびは何うして御歸國なされた。

傳八郎 大坂表の一件は、もはや當地にも聞えて居りませうが……。まだ御存じはござらぬか。

良然 (曖昧に。)さあ、薄々は承知して居ります。

傳八郎 (さびしく笑ふ。)傳八郎の噂はさん／＼でござらうな。

良然 (やはり曖昧に。)それはよく存じませぬが……。

傳八郎 お隠しなさるな。手前も大抵は察して居ります。その汚名をすゝぎたさに、人目を忍ん

で歸國いたしましたのでござる。傳八郎が立戻つたことは、暫く御内分にお願ひ申す。

(仔細は判らねど、良然はうなづく。下のかたより納所は茶碗を持つて出づ。)

良啓 召上つて下さりませ。

傳八郎 お、良啓どのも達者で目出たいな。

良啓 あなたもお健かで、おめでたう存じます。

傳八郎 手前はあまり目出たくもないが……。 (笑ふ。)兎もかくも無事で戻つて来た。

良啓 御ゆつくりなされませ。

(納所は會釋して去る。傳八郎は茶を飲んでゐる。良然は傳八郎のこゝろを測りか

ねて考へてゐる。雪ふる。下のかたにて甚五郎の聲きこゆ。

甚五郎 え、邪魔するな。退け、退け。

勘 作 いえ、人違ひでござります。

(庭口より勘作は甚五郎を支へながら出づ。)

甚五郎 それ見ろ。なにが人違ひだ。(勘作を手暴く突き退けて縁先へ来る。) 傳八郎、よく戻つて来たな。

傳八郎 お、甚五郎か。

甚五郎 (呷鳴る。) 藏屋敷からの早飛脚で、なにも彼もみな知れてゐるぞ。なんの爲に戻つて来たのか知らぬが、かうなつては問答無益だ。さあ、直ぐ表へ出ろ。

傳八郎 表へ出てどうするのだ。

甚五郎 知れたこと、門前へ出て勝負をするのだ。

傳八郎 (冷かに。) 又しても筋違ひのかたき討……。そんな勝負はもう御免だ。

甚五郎 なにが筋違ひだ。貴様のために惣左は討たれ、治左衛門兄弟は返り討にされ、遠藤の家は断絶だぞ。叔父の身としてそれを見てゐられるか。

傳八郎 遠藤の家断絶は氣の毒だが、それはお互ひの不運といふものだ。

甚五郎 なに……。

傳八郎 まあ、おちついて聽いてくれ。こゝのお住持も知つてゐらるゝ通り、あの一件は確に惣

左が非分で、あまりの無禮に堪へ兼ねて拙者が斬つて捨てたのだ。現に上のお捌きにも、相手が國遠した以上はお構ひなしと仰せ出されてゐる。その傳八郎に對してかたき討とは、大かたお手前やおふくろの指尺であらうが、物の道理が間違つてゐるぞ。かうなれば拙者も武士の意地で、治左衛門兄弟は勿論、傳八郎を仇と狙ふ奴等は誰彼の容赦はない。片端から一々返り討と覺悟を決めて、崇禪寺馬場で立派に勝負する事になつたのだ。

甚五郎 (あざ笑ふ。) お、立派だ、立派だ。大ぜいの加勢を頼んで……。

傳八郎 その加勢は拙者が頼んだのでない。門弟どもが勝手に出て来たのだ。手並は大かた知れてゐる遠藤兄弟、拙者ひとりでも返り討に出来たものを、血氣に燥る門弟共が天晴れの忠義顔をして、由ない加勢をした爲に、傳八郎の武士はさんくになつて仕舞つた。家断絶になつた遠藤兄弟も不運であらうが、武士の額に卑怯者の烙印を捺された傳八郎も不運でないとは云へまいぞ。かう云ふことにならないやうにと、拙者は惣左を討つた後直ぐに姿を隠したのだが、その心づかひをも汲み分けず、理非を問はずにかたき討の何のと騒ぎ立て……。

甚五郎 (せいて。) え、なんとでも理窟をいへ。兎も角もこゝで出逢つた以上、そのまゝ見逃がす甚五郎ではないのだ。さあ、表へ出ろ。勝負しろ。

傳八郎 こゝでお手前と立合つて、どちらが勝つても負けても詰まらぬ事だ。拙者には拙者の料

甚五郎 簡があるから、まあ長い眼で見てもてくれ。

(いよゝゝじれる。) まだ四の五の云つてゐるのか。さりとて齒痒い奴め、寺中の勝負はおだやかで無いと思へばこそ、先刻から遠慮してゐたが、飽くまでも動かぬといふなら是非がない。こゝで打果すからさう思へ。

(甚五郎は羽織をぬいで投げ捨て、刀に手をかけて縁へ飛び上らうとするを、良然は珠數を持つ手にて支へる。)

良然

先づお待ちなされ。唯今も云はるゝ通り、寺中の勝負はおだやかでござらぬ。しばらく……暫く……。 (甚五郎をなだめて、更に傳八郎にむかひ。) 傳八郎どの。丁度に御兩所が來合せたので、なにとぞ事なきやうにと念じて居りましたが、もうこの上は致方もござらぬ。なんとか相當の御返事をなされては如何でござるな。

傳八郎

相當の返事をせよとは……。 (考へて。) 傳八郎、いかにも承知いたしました。

甚五郎

では、表へ出るのか。

傳八郎

むゝ。表へ出て勝負しよう。併しけふはならぬ。あしたの朝まで待つてくれ。

甚五郎

まだ一寸逃れをいふのか。

傳八郎

いや、おれも侍だ。屹と約束した。

甚五郎

卑怯者の約束が當てになるか。

(甚五郎は又詰めよるを、良然は遮る。)

良然 傳八郎殿が屹と約束すると云はるゝからは、けふ一日を待たれぬ事もござるまい。愚僧に免じて明朝まで何とぞ御猶豫をねがひます。

甚五郎 むゝ。(かんがへてゐる。)

良然 傳八郎どのの當寺内に堅く預かり置きまして、決して取逃すやうなことは致しませぬ。その儀は御安心ください。

甚五郎 それほどにお受合ひなさるなら、傳八郎は明朝まで確にお手前にお預け申すぞ。

良然 承知いたしました。

甚五郎 これで傳八郎にも異存はあるまいな。

傳八郎 異存はない。

甚五郎 では、あしたの朝、重ねて逢はう。六つ半までに尋ねて來るから、待つてゐろ。

(甚五郎は歸り支度をする。勘作は落ちたる羽織の雪を拂ひて、甚五郎に着せかけ

甚五郎 傳八郎。

傳八郎 まだ云ふことがあるのか。

甚五郎 この甚五郎を遠藤兄弟と一つに思ふな。あしたの朝まで云ひ延ばして、崇禪寺馬場の二の舞を巧らんでも、その手に乗るやうなおれでは無いぞ。

(朝るやうに云ひ捨て、甚五郎は下のかたへ去る。勘作も送つてゆく。雪はだん

だんに強くなる。)

良然 傳八郎どの。お覺悟はよろしうござるか。

傳八郎 覺悟は疾うに決めて居ります。御迷惑でも今夜一と晩はお寺の御厄介に相成ります。

良然 それは勿論のことござる。ゆる／＼とお休みなされ。

傳八郎 この十日ほどは兎かくに心が落付かず、夜もおち／＼は眠られず、唯いら／＼と日を送つて居りましたが、故郷の城下へ歸り着いて……。殊にこのお寺の門内へ足を踏み入れましたら、急に眼の先が明るくなつて、心も軽くなつたやうでござる。今夜はゆつくりと眠られませう。就てはお住持。お別れにこれから一局、お相手を願へますまいか。

良然 圍碁でござるか。成程、お手前と碁盤に向ふのは久し振りでござるな。

(良然は立つて、床の間の碁盤を持ち出して來る。)

傳八郎 (碁盤をながめて。) 城下に住んでゐた昔には、たび／＼こちらへお邪魔にまゐつて、かやうに雪のふる一日を勝負に暮らした事もござつたが……。

良然 (嘆息して。) 思へば昔がなつかしうござる。それにつけても傳八郎どの。先刻は詳しうお尋ね申さなかつたが、今日わざ／＼當地へ戻られたのは……。

傳八郎 それは後刻ゆるりと申し上げます。先づ差當りは久し振りの勝負、お住持はその後定めて御上達でござらうな。(盤にむかつて碁石を取る。)

良然 (笑ふ。) いや、相變らずでござるよ。(これも碁石を取る。)

傳八郎 (同じく笑ふ。) と申されても、油断はならぬ。これが一生の名残りの勝負、あしたの勝負よりも大事でござる。

(傳八郎と良然は盤にむかつて石を打つ。奥にて木魚の音。雪ます／＼降る。)

—— 囃轉 ——

三

前の場の翌朝。きのふの雪は晴れて、今朝はかゞやく朝日を見たれど、降り積みたる雪は相當に深く、あたりは一面に白し。

舞臺は常稱寺墓地の一部にて、まん中に「生田家代々墓」と彫りたる石塔、花筒には新しき櫛が生けてあり。ほかに手桶と柄杓もあり。墓のそばには松の立木あり。左右にも大小種々の石塔、ほかに松、杉などの立木あり。三方は大竹藪にて、竹は雪に伏したるもあり。

(納所良啓は箒を持ち、生田家の墓前の雪を掃いてゐる。小鳥の囀る聲。上のかたより寺男勘作は白木綿と薄縁を持ち出て出づ。)

良啓 いゝ天氣になつて仕合せだが、案外に雪は積つたな。

勘作 きのふは晝過ぎから降り出して、夜通し降りつゞけてゐたのだから、この位は積るだらうよ。

勘作 さあ、これで支度は出来た。いや、まだあるぞ。それ、その櫛を……。

(勘作は良啓に指圖して、花筒の櫛の枝を取り、白木綿の左右に一本づつ挿し込む。上のかたより生田傳八郎は新しき草履をはきて出づ。)

傳八郎 あいにくの雪で、餘計に御苦勞をかけたな。用が済んだら、あつちへ行つてくれ。

良啓 まだお香爐を持つて參らなければなりません。(引返して上のかたへ去る。)

勘作 (名残り惜しきうに。) 且那樣。それではもうあちらへ參ります。

傳八郎 むゝ。行け、行け。

勘作 はい、はい。

(勘作はまだ去り兼ねて、手拭にて眼をふいてゐる。上のかたより良然は袈裟法衣の正装にて出づ。そのあとより良啓は香爐を載せたる白木の臺をさゝげて出づ。)

良然 (勘作に。) 支度が出来たら、早く行け。

勘作 はい。(會釋して行きかゝる。)

良然 表門は閉め切つてあるだらうな。

勘作 しつかりと閉めてござります。

良然 わたしが指圖するまでは、誰が來ても明けるなよ。

勘作 はい。承知いたして居ります。

(勘作は下のかたへ去る。良然は良啓をみかへりて眼で知らすれば、良啓は香爐を好きどころに据ゑ、これも會釋して上のかたへ去る。)

傳八郎 拙者のやうな者が不意に舞ひ戻つて、色々の御迷惑、甚だ相濟まぬことござる。昨夜も申上げたる通り、當方より遠慮して退身したるにも拘らず、飽までも拙者をかたきと附狙ふ者共は、片端より返り討に致して、立派に此世を渡らうと存じて居つたる處、思ひがけなき手違ひより、武士にあるまじき卑怯者と相成り申した。これも所詮は傳八郎の不運。せめては汚名をすゝぐ爲に故郷の郡山へ立歸り、先祖代々の墓前で切腹いたす覺悟。これまでのお馴染甲斐に、亡き後の御回向をお願い申す。

良然 お頼みがなくとも出家の役、委細こゝろ得て居ります。なにとぞお心置きなく……。

傳八郎 しからば御免ください。

(寺鐘の音。傳八郎はあらためて良然に一禮し、草履をぬいで白布の上に坐り、香爐に香をそなへ、うしろ向きになりて墓前に拜禮してゐる時、下のかたより勘作走り出づ。)

勘作 (傳八郎を見て。) おゝ、よかつた。間に合つた、間に合つた。

良然 (叱る。) えゝ、さわがしい。どうしたのだ。人を通してはならぬと云ひ聞かせてあるではないか。

勘作 いえ、それが……。餘の人とは違ひますので……。

(勘作は下のかたへ向つて差招けば、佐助を先に、お玉、軍藏は第一場の旅姿、雪を蹴つて走り出づ。)

お玉・佐助 旦那様……。

軍藏 先生……。

(二人は雪の中に手をつく。傳八郎は見かへる。)

傳八郎 生駒の町はずれで三人のすがたを見かけた時、行く先はこの郡山と推量したので、道をかへて先廻りをして来たが、やはりこゝで追ひ着かれたか。

お玉 もう一足でお目にかゝれぬ所を、嬉しいことごとざりました。

佐助 まつたく危ない所でござりました。勘作どんの話を聞いて、實にびつくり致しました。

軍藏 萬一こんな事になりはせぬかと、途中でも内々案じて居りましたが、かうして間に合ひましたのは何よりの仕合せでござりました。

傳八郎 そこでお前達は、なんと思つて傳八郎のあとを追つて来たのだ。

三人 え。(顔をみあはせる。)

傳八郎 又もやこゝへ邪魔に来たのではあるまいな。

(先を越されて、三人は又もや顔をみあはせてゐる。)

傳八郎 この上はかならず騒ぐな。なんにも云ふな。(屹となつて。)重ねて邪魔をするに於ては、お住持に頼んで門前へ追ひ出すぞ。

三人 はい。(泣く。)

良然 (諭すやうに。) 佐助殿のほかは見識らぬお人だが、こゝまで追つて来られるからは、御縁の深い方々でござらう。傳八郎殿の御生書をお止めなされたいは山々であらうが、今となつては及ばぬことござる。

お玉 でも、見すく見殺しには……。 (又泣く。)

良然 いや、殺すが却つて生かすの道理。なまじひに邪魔をなされては、傳八郎殿のお爲になりませぬぞ。

(お玉は泣き伏す。木魚の音。傳八郎は肌をくつろげて脇指をぬき、切腹の用意にかゝる。木魚の音だん／＼に早くなりて、傳八郎は脇指を腹に突き立てる。人々は眼を閉ぢて頭を垂れる。この時、下のかたより矢崎甚五郎は足早に出で、これを見おどろく。)

甚五郎 や、傳八郎は腹を切つたか。(つか／＼と進みよる。) 約束の時刻に来て見れば此の始末……。かうして自滅する程ならば、なぜ甚五郎と勝負をしないのだ。

傳八郎 討つも討たるゝも本意でない。生田傳八郎は自分ひとり死ぬ爲に、故郷の寺へ歸つて来たのだ。甥のかたき討をする積りで、こゝで拙者の介錯をしてくれ。

甚五郎 (うなづく。) かうなつたら兎かうは云ふまい。介錯の役は引受けたぞ。

(甚五郎は羽織をぬいで介錯の支度をする。)

傳八郎 では、頼む。

(傳八郎は脇指を引きます。良然はお玉に聲をかける。)

良然 それ、末期の水を……。

お玉 はい。

(お玉は手桶の水を柄杓に汲んで出せば、傳八郎は一口飲む。)

傳八郎 甚五郎、介錯……。

甚五郎 む。

(甚五郎はうしろへ廻りて刀をぬく。良然は口の中にて經文を唱へ、他の人々は合掌する。寺鐘の音。風の音。松の梢の雪ばさくと落ちる。)

幕

(福山製本)

昭和十六年六月三十日印刷
昭和十六年七月一日發行

改造文庫 第二部 第九十七篇

修禪寺物語 (他三篇)

定價五十錢

著者 岡本綺堂

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 堀内文治郎

東京市神田區三崎町二丁目二二

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番

電話芝(43)自一一二四番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(會員番號一〇六〇六七)

東京府規格外許可 第四三八號

(所刷印内堀)

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	三	六	六	六	九	九	二	二

改造文庫分類目録

政治・經濟・法律・社會	國富論(上卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 8	國富論(中卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 6	國富論(下卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 6	人口論(上卷) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(中卷) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(下ノ一) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(下ノ二) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 4	マルサス穀物條約論 鈴木清一郎譯 3	日本經濟論 田口卯吉著 1	日本經濟學說の要領 龍本誠一著 2	日本商業史 横井時冬著 4	日本工業史 横井時冬著 4	日本社會史 本庄榮治郎著 4	封建社會の研究 本庄榮治郎著 2
我近世の農村問題 本庄榮治郎著 3	世事見聞録 武陽隱士著 4	社會フアシズム論 ラビンスキー著 2	婚姻と離婚 ウェスクーマルク著 3	三民主義 孫中山著 3	三民主義續篇 孫中山著 4	財產起源論 レヴィン・スティーブ著 1	經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2	財政概論 田中次郎譯 4	プレブス經濟學 田所輝明譯 3	經濟地理概論 菊川忠雄譯 3	英國勞働運動史 稻岡運譯 3	原始財産論 長野兼一郎著 6	全金融資本論 ヒルファディング著 7	獨逸社會史(四) 塚本三吉譯 7
帝國主義論 ホブソン著 5	垂統秘録・混同秘策 佐藤信淵著 3	工業分布論 江澤謙一著 3	通貨調節論(上) 阿野季房譯 5	通貨調節論(下) 阿野季房譯 5	宗教・哲學・教育・歴史・地理 自然科學・美術・音樂 宗教及び信仰の起源 玉城 譯 3	エミール(上卷) ルイソウ著 4	エミール(下卷) ルイソウ著 4	リッケルト論文集 リッケルト著 2	唯一者とその所有 辻マックス・ステイルホル著 6	心理學概論 プレブス・リッケルト編 3	改哲學概説 桑木嚴著 5			

現代哲學思潮 桑木嚴著 6	キリスト教の本質 桑田悟郎譯 5	カントの平和論 朝永三十郎著 2	天才論 辻ロブソソ著 5	ドイツ古典ハイネ著 3	哲學の進歩性 栗原・高沖共譯 3	法律哲學綱要(上) ヘーゲル著 5	法律哲學綱要(下) ヘーゲル著 6	ヘーゲル精神哲學概要(上) グロー・フイツシエル著 6	ヘーゲル精神哲學概要(下) グロー・フイツシエル著 5	ドイツ史 フランツ・メリンク著 5	民族移動史 小田山榮三著 2	人類文化史物語(上) ヴァン・ルーン著 5	人類文化史物語(下) ヴァン・ルーン著 5	日本美術(上卷) 中村亮平著 5	日本美術(下卷) 中村亮平著 6	泰西美術の知識 中村亮平著 6	東洋美術(上卷) 中村亮平著 6
東洋美術(下卷) 中村亮平著 5	岡倉天心傳 清見陸郎著 5	妾の半生涯 福田英子著 4	建築と繪畫 内田佐久郎著 5	藝術とは何ぞや トルストイ著 3	人生論 柳田泉譯 5	藝術論(抄一) 井汲越次譯 3	藝術論(抄二) 井汲越次譯 4	ギョオテ傳 森鷗外著 7	トオマス・マン自傳 野修譯 2	ボオドレエル傳 森鷗外著 5	ニーチエ傳(上) 野上 譯 4	ニーチエ傳(中) 野上 譯 4	スピンノザ 野上 譯 4	歐洲文學發達史 外村史郎著 6	蟻の生活 村上啓夫譯 3	性と性格(上) 村上啓夫譯 4	
性と性格(下) 村上啓夫譯 5	文化と風土 丸山武次譯 6	この人を見よ 小栗孝則譯 4	誘惑者の日記 神保光太郎譯 5	日本開化小史 田口卯吉著 2	老子の研究(上) 序説 武内義雄著 5	老子の研究(下) 武内義雄著 4	人間の美的教育 村松次譯 4	教養の探求 大竹 譯 3	自然界における地位 石田茂一譯 4	精神科學の論理 J.S.ミル著 5	科學概論 内山賢次譯 5	朝鮮慶州の美術 中村亮平著 6	國文學	古事記傳(一) 本居宣長著 6	古事記傳(二) 本居宣長著 6		

新萬葉集略解(一) 藤本健吉校註	6	宇治拾遺物語(下) 中島悦治校註	6	頭其角俳句集 萩原蘿月校註	5
作者別萬葉全集 土岐善麿編著	6	大和物語 水野駒雄校註	4	芭蕉遺語集 萩原井泉水校訂	3
現代源氏物語(一) 窪田空穂譯	5	伊勢物語 久松潜一校註	2	茶七番日記(上卷) 萩原井泉水校訂	4
現代源氏物語(二) 窪田空穂譯	5	雨月物語 山口剛校訂	2	茶七番日記(下卷) 萩原井泉水校訂	4
現代源氏物語(三) 窪田空穂譯	5	國歌八論 土岐善麿編著	3	新華摘・蕪村翁文集 萩原井泉水校訂	2
現代源氏物語(四) 窪田空穂譯	5	平賀元義歌集 藤松壽樹・野田實編註	6	大經師昔曆 樋口慶千代評註	2
平家物語(上卷) 吉澤義則校訂	4	會根崎心中、心中天の綱島、女殺油地獄 黒木勘藏校註	3	重井筒 樋口慶千代評註	2
平家物語(下卷) 吉澤義則校訂	4	好色一代男 神谷鶴伴註釋	5	萬葉漫筆 佐佐木信綱著	6
徒然草 吉澤義則校訂	3	折たく柴の記 伊豆公夫校註	6	おらが春・一茶文集 萩原井泉水校訂	5
拾遺愚草(一) 藤原定家著	5	草雙紙 尾崎久彌編	5	東遊記 橋南・翁著	5
拾遺愚草(二) 藤原定家著	5	芭蕉書簡集 萩原蘿月校訂	3	西遊記 橋南・翁著	5
新古今和歌集 吉澤義則校訂	5	冬の日 全釋俳諧(一) 萩原蘿月著	3	世間胸算用 井原西鶴著	3
金槐和歌集 半田良平校訂	5	蕪村七部集 萩原蘿月校訂	3	日本永代藏 井原西鶴著	3
新神皇正統記 宮地直一校註	6	俳諧七部集 萩原蘿月校訂	3	現代日本文學	
宇治拾遺物語(上) 中島悦治校註	6	俳諧續七部集 宇田久校註	3	(小説・戯曲・評論・詩・短歌・俳句・隨筆・紀行)	
		其角七部集 宇田久校註	3	みだれ箱 藤澤雨譯	4
				うた日記 森鷗外著	3

澁江抽齋 森鷗外著	6	草枕 夏目漱石著	2	厭世家の誕生 日佐藤春夫著	1
北條霞亭(上) 森鷗外著	5	それから 夏目漱石著	3	田園の憂鬱 佐藤春夫著	4
北條霞亭(下) 森鷗外著	5	一握の砂・悲しき玩具 石川啄木著	2	お絹とその兄弟(他六篇) 佐藤春夫著	5
瀧口入道 高山樗牛著	2	我等の一團と彼 石川啄木著	1	上 海横光利一著	5
樋口一葉選集 樋口一葉著	1	短歌集 石川啄木著	4	日 労働者の居ない船 山崎樹徳著	1
樋口一葉選集(第二卷) 樋口一葉著	5	詩集 石川啄木著	5	海に生くる人々 山崎樹徳著	2
北村透谷選集 島崎藤村著	1	小説集(上) 石川啄木著	6	はやり唄 小杉天外著	3
山陰土産その他 島崎藤村著	2	小説集(下) 石川啄木著	5	朝の螢 藤茂吉著	2
海へ 島崎藤村著	5	評論感想集(上) 石川啄木著	4	十一年 島木赤彦著	2
三 人島崎藤村著	3	評論感想集(下) 石川啄木著	4	川のほとり 古泉千渥著	2
出 發 島崎藤村著	4	書簡集(上) 石川啄木著	5	松の芽 中村憲吉著	2
藤村隨筆(上) 島崎藤村著	3	書簡集(下) 附年譜 石川啄木著	4	立 海やまのあひだ 釋道空著	4
藤村隨筆(下) 島崎藤村著	5	作白秋民謡集 北原白秋著	2	花 櫻 北原白秋著	3
平 凡二葉亭主人著	1	作白秋童謡集 北原白秋著	2	人間往來 與謝野晶子著	2
子規俳話 正岡子規著	3	作白秋國民歌集 北原白秋著	2	概の木 窪田空穂著	2
子規歌論 歌川陽光編	3	明治大正詩史概観 北原白秋著	4		
坊つちやん 夏目漱石著	2				

自選 野原の郭公 若山牧水著	2	自選 原 林前田夕暮著	3	自選 空を仰ぐ 土岐善磨著	1	新選 秀歌百首 齋藤茂吉著	3	鶯の 卯土岐善磨著	3	啄木 追懷 土岐善磨著	6	信綱 文集 佐佐木信綱著	2	愛すればこそ 谷崎潤一郎著	3	愛なき人々 谷崎潤一郎著	3	屋上の 土古泉千櫻著	5	青 牛 集 古泉千櫻著	5	みだれ髪・小扇・緑衣 與謝野晶子著	3	句集 虚子 高瀬虚子著	6	井泉水句集 萩原井泉水著	5	性に眼覚める頃 室生犀星著	4	室生犀星詩集 室生犀星著	5	千家元麿詩集 千家元麿著	3
横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著	5	修禪寺物語 岡本綺堂著	3	少年の悲哀 岡本獨歩著	2	運命論 者 岡本獨歩著	2	武藏 野 岡本獨歩著	5	愛へ 怨 武者小路實篤著	2	父と娘(他四篇) 武者小路實篤著	4	わしも知(他十篇) 武者小路實篤著	4	人生雜感(感想) 武者小路實篤著	4	日本 橋 泉 鏡 花著	5	無名作家 他廿(短篇小説集) 菊池寛著	5	出 世 他廿(短篇小説物) 菊池寛著	4	恩醫の 他廿(短篇小説) 菊池寛著	5	彼方に 八篇(篇時代物) 菊池寛著	5	噂の發生 他廿(短篇小説) 菊池寛著	4	父歸る 他廿(戯曲篇) 菊池寛著	5	藤十郎の戀 他十(戯曲篇) 菊池寛著	6
眞珠夫人 菊池寛著	6	慈悲心 鳥池寛著	4	新 珠 菊池寛著	5	火 華 菊池寛著	4	受 難 華 菊池寛著	5	赤い白鳥 菊池寛著	3	明 眸 禍 菊池寛著	5	新 女 性 鑑 菊池寛著	3	陸の 人 魚 菊池寛著	4	第二の接吻 菊池寛著	3	東京行進曲 菊池寛著	3	結婚二重奏 菊池寛著	3	不壊の白珠 菊池寛著	3	今戸心 中 廣津柳浪著	3	嬰兒殺し 山本有三著	3	芭蕉・夜船・草の詩 吉田紋二郎著	3	楠木正成 直木三十五著	7

ドレフユース事件 大佛次郎著	3	天保赤門 黨土師清二著	5	血染のパイプ 甲賀三郎著	4	苦の世 界 宇野浩二著	3	山戀 ひ宇野浩二著	4	藏の中(他四篇) 宇野浩二著	5	矢鳥 柳堂 志賀直哉著	2	焚 火 志賀直哉著	2	老 人 志賀直哉著	2	網走まで 志賀直哉著	2	速夫の妹 志賀直哉著	2	好人物の夫婦 志賀直哉著	2	雪の 日 志賀直哉著	2	暗夜行路(前篇) 志賀直哉著	3	多情佛心(前篇) 里見 寛著	3	多情佛心(後篇) 里見 寛著	3	青 年(上卷) 林 房 雄著	4		
青 年(下卷) 林 房 雄著	4	自選 短篇集 林 房 雄著	7	斬るな劔 他九篇 白井 裕二著	5	大暴風雨時代 前田河廣一著	5	淺草紅團 川端康成著	5	童 謡 川端康成著	4	化粧と口笛(他三篇) 川端康成著	5	悪 太 郎 尾崎士郎著	5	白き手の人々 吉屋信子著	1	風 俗 石坂洋次郎著	4	喧嘩 駕籠 長谷川 伸著	5	角兵衛物語 長谷川 伸著	5	唐人 お吉 十一 谷義三郎著	2	時 唐 人 お吉 十一 谷義三郎著	4	笑ふ男 笑ふ女 十一 谷義三郎著	5	或る女(上卷) 有島武郎著	4	或る女(下卷) 有島武郎著	3		
星座・生れ出る悩み 有島武郎著	4	宣言・クララの出家 有島武郎著	3	迷 路 有島武郎著	3	カインの末裔・潮騒 有島武郎著	2	お末の死・かんかん蟲 有島武郎著	2	旅する心 有島武郎著	2	石にひしがれた雑草 有島武郎著	2	惜みな愛は奪ふ 有島武郎著	2	有島武郎戯曲集 有島武郎著	4	有島武郎書簡集 有島武郎著	5	有島武郎日記集 有島武郎著	4	彌太郎 笠子母澤寛著	4	神變驕香猫(上卷) 吉川英治著	4	神變驕香猫(下卷) 吉川英治著	3	女 給 廣津和郎著	5	收水歌集(1) 若山牧水著	4	收水歌集(2) 若山牧水著	4	收水歌集(3) 若山牧水著	4

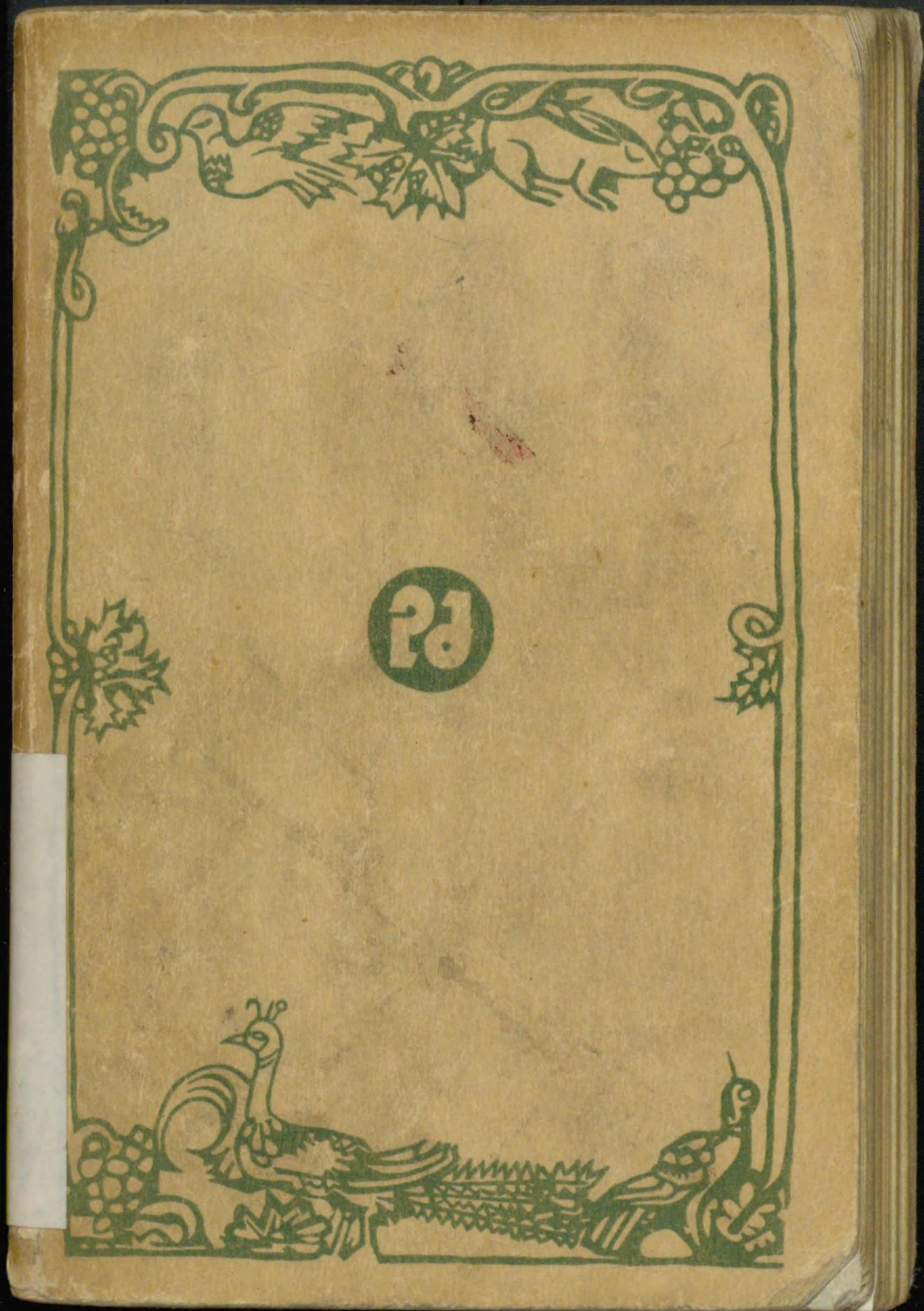
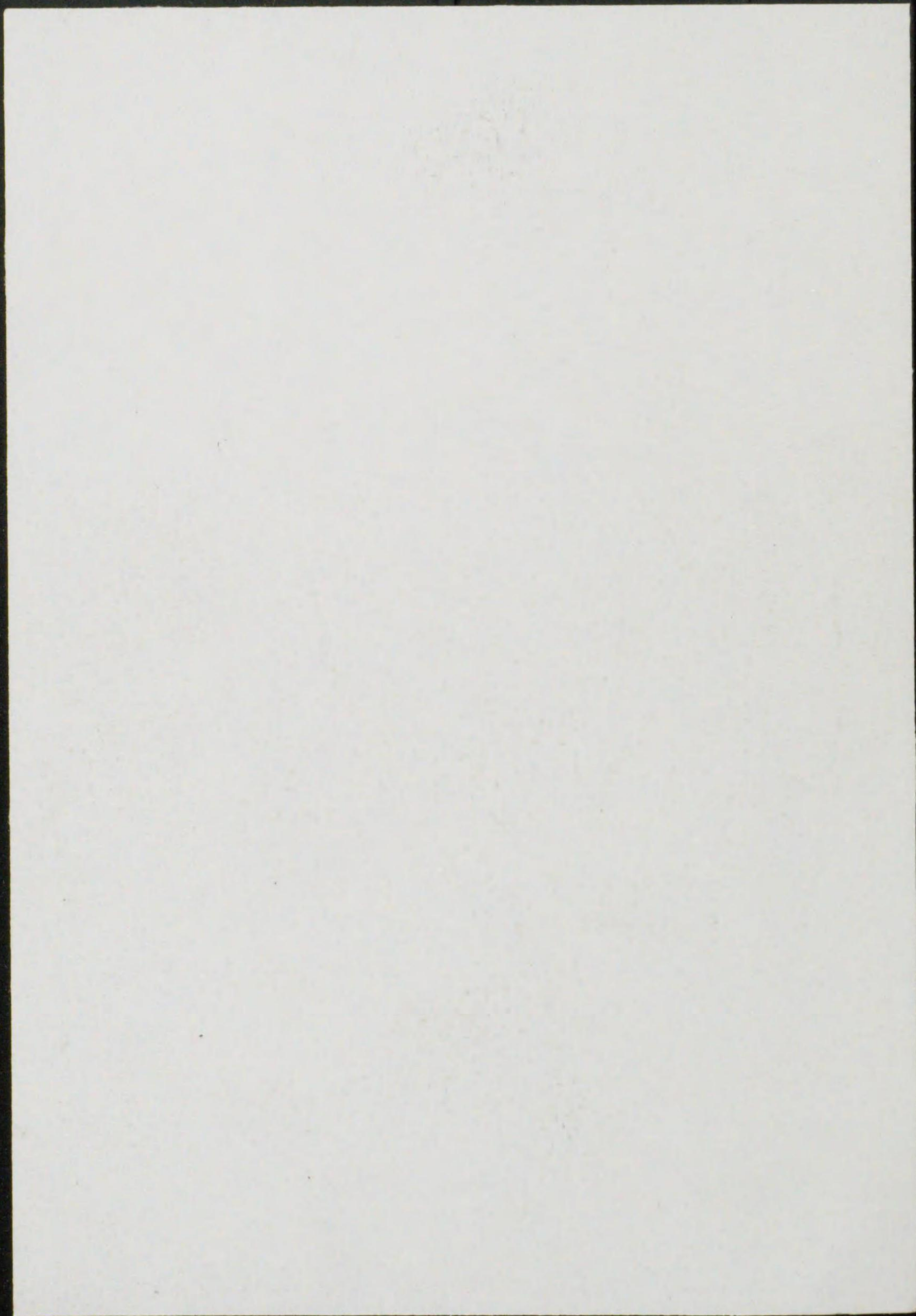
野性の呼聲	花岡 龍一	3
奈落の人々	和氣 律次	3
争闘	和氣 律次	2
勝利と敗北	中山省三	3
肉體の悪魔	土井 小牧	3
英詩選	野村 胡堂	4
平妖傳 (上卷)	佐藤 春夫	4
平妖傳 (下卷)	佐藤 春夫	3
イブセン全集 (第一卷)	河野 義博	3
イブセン全集 (第二卷)	長谷川 幸延	5
イブセン全集 (第三卷)	仲木 貞一	5
イブセン全集 (第五卷)	大關 裕一	5
聖書物語 (舊約)	神近 市子	3
聖書物語 (新約)	神近 市子	3
洋服 箒	大笠 武生	2
オク家の人々 (一)	吉良 良吉	4
オク家の人々 (二)	吉良 良吉	4
現代	男梅 田	5
現	長 詩	3
回想・告白	白土 井義	4
ルテツイア (第一部)	土井 義信	5
ルテツイア (第二部)	土井 義信	5
戀愛詩集	生田 春月	5
社會詩集	生田 春月	5
苦難の路 (上)	原 久一郎	4
苦難の路 (下)	原 久一郎	4
結婚の悲劇	原 久一郎	5
人	波 久	3
わが毒舌	石川 瀧	5
新人國記	木村 恭一	4
オク家の人々 (三)	吉良 良吉	4
ブツデンプロ	吉良 良吉	4
五月の夜	織原 惟人	3
すばらしの街	杉本 貞吉	3
新我等の心	中村 星湖	4
新死の如く強し	中村 星湖	5
色ざんげ	モウバツサン	3
初雪	モウバツサン	3
モウバツサン戯曲集	野 威雄	4
ベルシヤ人の手紙	森田 禮門	6
小公	若松 賤子	2
作家	平岡 秋田	4
ドストエフスキー論	秋田 滋	5
背徳	石川 瀧	2
蕩兒歸る	安田 修三	2
戀をしてみて	安田 修三	2
法王殿の抜穴	生島 遼一	6
ホムブルグの公子	沼野 修	5

牧水歌論歌話集	若山 牧水	5
短歌作	法窪 田安	6
牧水紀行文集	若山 牧水	4
歌鏡	葉 霜田	4
貝殼追放 (上卷)	水上 瀧太郎	7
貝殼追放 (下卷)	水上 瀧太郎	7
葛西善藏小説集 (卷一)	葛西 善藏	3
葛西善藏小説集 (卷二)	葛西 善藏	4
葛西善藏小説集 (卷三)	葛西 善藏	4
葛西善藏小説集 (卷四)	葛西 善藏	3
葛西善藏小説集 (卷五)	葛西 善藏	3
葛西善藏小説集 (卷六)	葛西 善藏	3
葛西善藏感想集	葛西 善藏	5
頼朝・爲朝	幸田 露伴	3
蒲生氏郷	幸田 露伴	2
龍姿蛇姿	幸田 露伴	5
幽秘記	幸田 露伴	6
近代の戀愛觀	野川 白村	3
象牙の塔	野川 白村	4
十字街頭を往く	野川 白村	3
近代文學十講	野川 白村	5
文藝評論集	小林 秀雄	3
石川啄木	木金田 一	5
愛弟通	信 國木	4
支那游記	芥川 龍之介	4
機械	他八篇	4
天地有情	土井 晩翠	5
俳諧師・續俳諧師	高嶺 嶺子	5
ふりだした雪	他四篇	5
南蠻更紗	新 村 出	6
勝海舟	舟山路 愛山	5
外國文學	大誠室・接吻	4-5
可愛い女	梅田 電	5
チエーホフ 傑作集	チエーホフ	5
チエーホフ 傑作集	昇 昭	4
寡婦マルク	見 隆	3
ニ	武林 無想	6
一青年の告白	辻 野	3
一週	池谷 信三	2
新巴里の憂鬱	三好 達治	3
母への手紙 (上)	堀 川 孝	4
母への手紙 (下)	堀 川 孝	4
母への手紙	堀 川 孝	4
ランボオの手紙	堀 川 孝	3
死の舞	山本 有三	2
佛蘭西童話集 (第一卷)	ボームン 夫人	3
佛蘭西童話集 (第二卷)	ドルノア 夫人	5
佛蘭西童話集 (第三卷)	ヘロー 一	3
佛蘭西童話集 (第四卷)	ハルソン 夫人	6
佛蘭西童話集	長松 英一	5
佛蘭西童話集	長松 英一	6
佛蘭西童話集	長松 英一	6

56
42

最新刊書目

西園寺公望 田中貢太郎著 5	牧の方 坪内逍遙著 5	伊澤蘭軒 (上) 森鷗外著 6	譯詩集 海潮音上田敏著 5	忠兵衛梅川冥途の飛脚 博多小女郎波枕 守松門左衛門作 守隨憲治校註 3	江戸名所記 守隨憲治校註 8	蜻蛉日記 (上) 勝俣久作校註 4	現代語源氏物語 第五册 窪田空穂譯 5	新萬葉集略解 (二) 森本健吉校註 5	國文學史講話 藤岡作太郎著 7	國文學全史 平安朝編 (上) 藤岡作太郎著 6
國民經濟學體系 (上) 下	社會學の根本問題 ユイベル大哲學史 古代篇一	少女ローレ他二篇	ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン	滯佛陣中記	二重の誤解他數篇	マシフレッド・カイン	愛すべき一家他七篇	あるぶす大將	徳川家康 (上)	
フリードリッヒ・ヒースト著 谷口吉彦・正木一夫共譯 各6	堀真琴譯著 3	山本光雄譯 7	鹽谷太郎譯 5	新關良三譯 5	ゲルハルト・テフ著 6	江口清譯 4	岡本成蹊譯 4	水之上齊譯 4	吉川英治著 7	山路愛山著 5

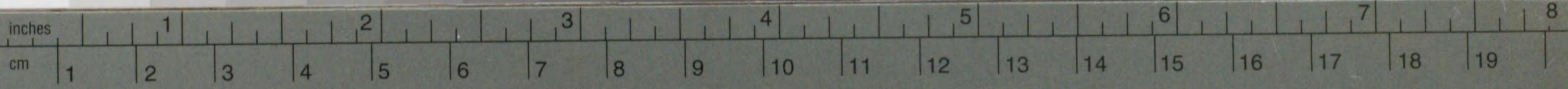
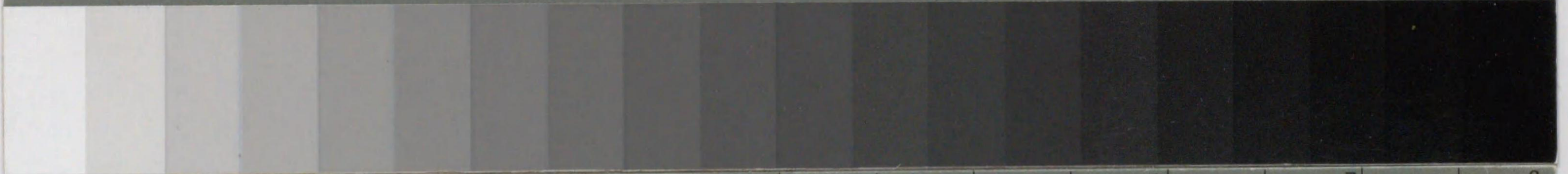


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

